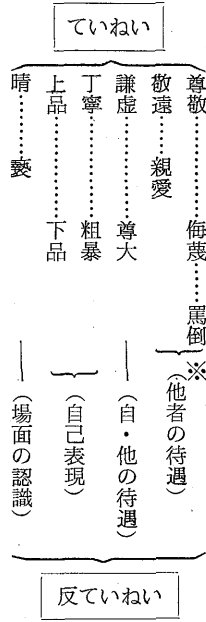


山口県萩市方言の待遇表現法

岡野信子

はじめに

ことは常に何等かの待遇意識をもって、人と人との間に交されている。会話の世界における、さまざまな待遇意識とその表現は、ほぼ次のように体系づけることが出来ようか。



※ 会話の相手および話題の主を含めて他者と称する。

右表の………は、この間に何段階か考えられることを意味している。現実の会話の場では、これらの多様な待遇意識は右表に示すように、ていねいと反ていねいの方向に総合される。ここに言うていねいは、いわゆる尊敬・謙遜・丁寧の三者を統括したていねいであり、土地人が、「ものいいがていねいな」と評する時のていねいである。反ていねいは、「ものいいがあらましな」と批評される。人々はこのような待遇意識を託すのに、ど

山口県萩市方言の待遇表現法

のような表現法をとるのであろうか。この小稿では、山口県萩市方言の待遇表現法（以下待遇法と称する）を見ていきたい。萩市は日本海に面した、山口県西北部の都市である。人口約五万三千人（昭和四〇年一〇月）、城下町旧萩を中心に、日本海沿いに南北に拡がっている。この地の方言は、長門地方方言を代表するものと見ることが出来る。萩市方言の待遇法を見るにあたって、

- 1、辞の働きの注目される待遇法
- 2、詞による待遇法
- 3、待遇表現上の特殊文

の三項目をたてた。1では助動詞・助詞・接辞による待遇法を見る。2においては動詞・名詞に尊・卑を言い分けるものを考察の対象とした。最後に文の待遇とも言うべき表現法を取上げる。

注1 方言文の右側傍線は高音部を示す。

注2 方言の音声は片仮名で示した。アエ・サエは、ほぼ〔æ〕・〔ae〕に相当する一音節を示す仮名である。サエエルは〔særu〕に相当する。

注3 方言文例の下の（老女↓老男）は、老人女子から老人男子へ語りかけた文であることを示している。（老男↓）

は筆者への語りかけである。

注 4 以下にあげる資料は、昭和四十四年六月～十月の間に得たものである。

1 辞の働きの注目される待遇法

1・1・0 助動詞・助詞の働く尊敬表現

ここに言う尊敬は、尊敬・敬遠―遠慮―親愛等々を包含する幅広いものであって、辞の働く敬意表現法は采えている。

1・1・1 ナサレマス類・オ～ナサレマス類

ナサルとマスの複合辞である。接頭辞を伴う動詞に続くことも多く、敬意は高いが、ナサレマス↓ナサイマス↓ナサンス(ナハンス)↓ンサンス↓サンスと形が簡素になるにつれて敬意も軽くなる。

。ヨイ オイデナサレマシタ。 よくいらつしゃいました。(老女↓)

。ゴメンナサンセ。 失礼致します。(老男↓中女)

。キオツケテ オイキンサンセ。 気をつけていらつしゃい。

(老女↓)△見送り▽

。ワタシヤー ヤメル オリ アンタモ ヤメサンセ。 私が

役員をやめる時、あなたもやめなさいよ。(老女↓老女)

中・老年者―特に女性―がよく用いており、サンスがもつとも盛んである。青・少年者はこの類の辞をほとんど用いないが、漁業区越ガ浜の青年男子からはサンスを聞いた。サンスの命令形サンセは、「見る」「来る」「する」などの、語幹が一音節の動詞に続く時は、ミーサンセ、キーサンセのように動詞部分を長呼して続く。

1・1・2 ナサル類

この類には、ンサレル・ンサエエル↓サレル・サエエル・サルがあるが、ンサレル・ンサエエルの頻度は低い。

。タナカセンセーガ シラベテ ミンサレタ。 田中先生が調べてみられた。(老男↓)

。イーサレン ソ。 お父さんはそうは言われないのよ。(中女↓夫)

。アエエーガ キサエエタ トキニヤー マダ ネチヨツタ。

君が来られた時はまだ寝てたよ。(青男↓青男)

。ドコ イキサエエル ノ。 どこへ行かれるの。(中女↓中女)

。イマカラ ヤリサル カ。 今からなさるのか。(中男↓中男)

。オイサレー ノ。 負んぶなさいよ。(老女↓嫁)

。ホーラ ミーサエエ ホロケタローガ。 ほうらごらん、

落ちたじゃないの。(母↓子供)

。フロノミズ ミーシヤイヤ。 風呂の水を見なさいよ。(老女↓孫)

ンサレル・ンサエエルの敬意はやや高いが、その他は同年または年下の者に対する敬辞であって敬意も軽い。これらの辞を添えて表現を和らげると言った方が適切であろうか。命令形が一音節連用形の動詞に続く時は、サンセと同じく動詞部分を長呼する。

ナサイマス類・ナサル類において、最も耳だつのは命令形である。相手に命令し依頼する時、人は自然に待遇品位をひときわ高めて遇するのである。次にあげるレル・ラレルに命令形がないこと

も、この類の命令形を活躍させる一因であろう。

若い女性の言うイキンナ(行っちゃ駄目)シンナ(しちやあいけ
ない)の「ン」は、ナサル之最も簡素化されたものであろうか。連
用形に続くこの「ン」は、単純な添加音ではあるまい。

1・1・3 レル・エル・ラレル・ラエル

全年層によく行われている。待遇価はナサル類とはほぼ同じである
が、会話の相手や話題の主にくらか距離感―遠慮―がある時、こ
の類がよく用いられる。々あらたまつたものいい々を形成する辞で
ある。ナサル類よりは新しい敬辞ではあるまいか。

。ナニ―シツチヨラリヨ― ジャー。 あの方が御存知だろ
うよ。(青男↓青男)

。タビタビ クラエタラ ヨー ワカリマス ヨ。 度々来ら
れたらよくわかりますよ。(老男↓)

。タシヨ― ノコツトラエル ノンタ。 昔の友人も多少残つ
ておられますよ。(老男↓)

1・1・4 ヤル

ヤルは既に言われているように「ある」であろう。萩市方言の敬
辞の中では、待遇品位は最も低い。

。ヨ―デ カカシャリリヨツタ ソエノ。 おじいさんがよく
読んで聞かせておられたんですよ。(老男↓老男)

このように、自身の祖父母・両親・夫のことを語る時によく用い、
他人に用いるのは、いわゆる目下の者のことを言う場合である。

。マメニナリヤツタゲナ。 あつちの嫁は安産だったそうだ。
(老男↓老男)

山口県萩市方言の待遇表現法

対者敬語としては妻子や孫に用いる程度である。

。コッチ― キヤ―レ―ノ。 こっちにおいて。(老男↓妻)
使い古されて品位も下つたのであろうか。農漁村の老人男子以外は
ほとんど用いない。

1・1・5 オゝマス・ゴゝマス

土地人が「タベサンセは心易い人に言い、オアガリマセは外来者
に對して言う。」と説明するように、品位はナサイマセに続いて高
い。

。キョ―ドシノ ケンキューナサル ガンカノ センセীগ オ
イデマス。 郷土史の研究をなさる眼科の先生がいらつしや
います。(老男↓)

。モ― オカエリマシタ デ。 あの方はもうお帰りになりま
したよ。(老女↓)

話題の主が敬すべき人であることは言うまでもないが、外来者にて
いぬいに言おうとして、話題の主をも最高に遇する傾向が見られ
る。ゴゝマスはゴローシマセ(御覧なさいませ)が聞かれただけで
ある。敬語動詞に続く時は、アガリマセ(召上れ)のように才が除
かれることもある。

1・1・6 「テ」尊敬法と「チャツタ」ことは

日常敬語として全年層によく行われている。

。アネ―ン コト ユ―テデ アリマシタ。 あんなことを言
われました。(老女↓)

。カミサマガ オツテジャ。 船には神様がおられる。(老男
↓中男)

。ワローテヤロー。 笑われるだろう。(中女↓中女)

これらはテに指定辞が続いたものであるが、指定辞を伴わない表現もある。

。アリヤー ネチヨツテ。 おじいさんは病気で寝ておられ

る。(少女↓)△おじいさんは元気かと尋ねたのに対して▽

次は文末詞に統括されたものである。

。ナゴ オツテ カノンタ。 今度は永くいらつしやるの。

(妻↓下船中の夫)

テに注目する時、これらはク助詞の働きの注目される尊敬表現法^クと言えようか。待遇品位はサエエルよりはや高いという。命令形はない。テと指定辞ジャツタ・ヤツタが熟合したチャツタも盛んである。現実態に注目すれば、「チャツタ」ことばとでも言うべきであらう。

。イツチャ ナエーカ。 いらつしやらない?(老女↓老

女)

。ヨー ネバツチャツタ。 あの方はよくねばられた。(老女

↓中女)△家を手離さなかった話▽

熟合しないものに比して品位はやや低い。テ敬語が連体修飾部に立つ時は、助詞ノを伴う。

。カミサマ ヨー シラセテノ モンジャノ。 船の神様

は危険をよく知らせて下さるものだなあ。(老男↓老男)

。キニシテノ コター アルマーデ。 気になさらくとも

大丈夫でしょうよ。(老女↓老女)

1・1・7 「二」敬語

。フクナガニモ ユーテジャロー。 福永さんも言われるだろ

う。(老男↓中男)

。アンタニヤ オイデマス カ。 御在宅ですか。△中・老

年者の訪問辞▽

主語の部分に助詞ニを添えて軽い敬意を示している。時には自分側をニで遇することもある。相手にむかつて、ていねいに言おうとしてのことであらう。

。ウチニモ イキマシタ。 家の息子も野球の応援に行きました。

(老男↓)

体言にニを続け、動詞にテを続けて言うことは、いずれもいくらか間接的な表現である。直接表現よりは間接表現にクていねい^ク意識が託されるのであらうか。

1・2 助動詞の働く丁寧表現

ここに言うク丁寧^クは、尊敬・謙譲と並ぶ丁寧である。丁寧辞には、ゴザルにマスの続いた、ゴザリマス↓ゴザイマス・ゴザエマス↓ゴザンス・ゴワンスと、アリマス↓アンス↓ヤンス↓ヤス、およびマスがある。

。キヨウワ ゴクローサンデゴザエマシタノ。 (老女↓

僧)△月参りの僧への謝辞▽

。ヨーガ ナイノデゴザンスノ。 老人なので用事がないん

ですよ。(老女↓)

。アリガトゴワンス。(老男↓)

。イマワ タビカラ オユーアリマス。 当節は他地から嫁に

来る人が多うございます。(老男↓)

。ソーデアンシヨ。 そうでしよう。(中女↓中女)

。オツグンデヤンス ノー アリヤ。 大津郡ですね。そのことは。(老男↓)

。ミナ カワツテヤシタ。 みんな変られました。(老男↓)

ゴザリマスルは聞けなかつたが、故人で必らずゴザリマスルという人がいたと越ガ浜の一人老人が語つた。古い頃には用いていたのであろうか。それとも個辭と見なすべきであらうか。

中・老年者に「デス」がほとんど聞かれない点に、この地の方言の一特質が感じられる。若い人々は「デアリマス」を用いず、「デス」を用いることが多くなつていく。

1・3・0 接辞による待遇表現

接頭辭・接尾辭による待遇品位は尊・卑ともによく発達している。

1・3・1 尊敬の接辞

。オウトシゴザイマス。 うつとおしいお天気でございます。

。ゴネンノ イリマシテ。 御丁寧にありがとうございます。

△返礼の品などをもらった時の挨拶▽

このように、和語にはオ、漢語にはゴを添えて品位を高めることは、挨拶ことばにおいて特に盛んである。一方、待遇の接尾辭は次のように細かに言い分けられる。

。サマ 他家の年長者をニーサマ、ネーサマと呼ぶ。

。マー・マ 同年または同年以下の者をヤスマー、アキマな

山口県萩市方言の待遇表現法

どと呼ぶ。

。サー・サ マー・マより低い。 姑が嫁を呼ぶ時などによく用いる。

。ヤー 最も低い。我が子をカーヤーのように呼ぶ。

。サン・チャン 新しい接辞である。今日ではマー・サー・ヤーの区別なく、大人にはサン、子供にはチャンを用いることが多い。

。ジョー オバジョー、アネジョーのように女性を指して言うことが多いが、コナジョー(この人)は男女ともに指して言う。

。シユー タロシユーヨーと、男性が友人を呼ぶ接辞である。

このほか、年層を示す接尾辭を名前につけて、モトオジ、ヤスーオバ、ジロニー、ハルネーのように呼ぶことも、農漁村の老人男子には今も聞かれる。

1・3・2 卑罵の接辞

尊敬の接辞が年令によって使い分けられるのに対して、これは人の性行を評する語の構成要素としてよく行われている。

。ドゥ ドヒョーシモン(思いきつたことをする人)

。タロ フヨタロ(怠け者)・ネタロー(寝坊)

。サク トロサク(間抜け)・オーギョーサク(誇大家)

。スケ ノミスケ(大酒家)・トロスケ(間抜け)

。コー コーナ シーコー(この爺め)

。ドー アンバクドー(腕白め)

。メ コンナ ゲドサレメ(この奴め)

。クソクソクソ クソゲドー(この奴め)・メッタクソニ(

めったに)

。クサレ^レ・^レクサレ　クサレダエ^レク(下手な大工)・イジクサレ(根性の汚い者)

その二部を取上げてものように多様であつて、漁業区の男性語として榮えている。卑罵の接辞と言うよりは、誇張・強勢の辞と言ふべきであろうか。尊敬の接辞に單純化の傾向が見られるのに対して、ここには新造、多様化の勢が見られる。

2 詞による待遇法

2・1・0 動詞による待遇表現

動詞によって待遇品位を言い分けることは、特定の語詞にのみ行われることで、辭によるものほどに一般的ではない。この中で、授受に関しては敬語動詞がよく働いている。

2・1・1 授受に関する動詞

会話の相手および話題の主の^ク授^クは、尊敬動詞ツカサル・クダサル・クシャル・オクレルで示し、話者の^ク与^クは謙讓動詞アゲル・マセルで言う。話者の^ク受^クを言う謙讓動詞イタダク・チョードアエールに対応する尊敬動詞はない。普通動詞のモラウに対する語はヤルであろうが、ヤルにはやや尊大の気分が感じられる。授受に関する動詞ではツカサルの頻度が高く、殊に命令表現には、ツカサエエ、ツカエエ、ツカサエエ、ツカール、およびマスを伴つたツカサエエマセ、ツカサンセなどの様々の形が榮えている。

これら授受に関する動詞においては、「コーテ　ツカサンセー
ノ。(買つて下さいな。)」のように、助詞テに終る話部に続けて

言うことも多い。

。コンタニ　マシヨ^レ。　お前に上げよう。(老男↓孫)

これは農業区山田の、八十を越えた老人が、孫にお菓子を与えた時のことばである。今は老人にごく稀に聞くことがある程度で、忘れられていくことばのようである。他の授受の動詞のように、助詞テに終る話部に続ける用法もない。授受の動詞は常に二者間の待遇關係を示す点で特異である。

2・1・2 その他の尊卑動詞

。オイデル・ミエル・ゴザル・ジャール

「来る」の敬語動詞である。ミエルはオイデルよりやや敬意が軽い。ゴザルは今日は用いられないが、老人は子供の頃、「ヨ^レゴザッタ^レノ。」「ヨ^レゴダンサエエタ^レノ。」と、客を迎えた祖母がよく言つたと教示した。ジャールもごく稀にしか聞かれない。

「コッチ^レジャール^レノ。(こっちにおいてよ。)」と、山田地区の古老は妻を呼んだが、他人には使えないと言ふ。「おりやる」を出自とする、ごく軽い敬語であろうか。

。オシラレル(オシラエル)

「仰せられる」であろう。「オ^レセラレマシタ^カ。」と言えば更にいいいである。

。ゴロージマス(御覧になる)

「シンブンゴロージマシタ^カ。」「キイチ　ゴロージマセ。」などは稀に老人に聞かれる。老人死去の悔みを受けた時の謝辞の中で、「……、ゴロージマセ、オセワニナリヨリマシタガ……。(……、ま

あ御覽下さいまし、お世話になっておりましたが……。」と問投詞
風に用いることは中年以上の者に行われている。

。オヨル・オシズマル・オヤスミニナル

「寝る」の尊敬語。オヨル・オシズマルは今ほとんど用いられな
い。

。オヒニナル (お目覚めになる)

古老の記憶に残っている語。今は用いられない。

。アガル・オアガル 「食べる」の尊敬語

。イタダク 「食べる」の謙讓語

卑罵の動詞としては、ヌカス(言いやがる)を聞く程度である。敬
辞・卑辞を添えて尊卑を表現することが今も榮えているのと対比的
に、尊卑動詞はむしろ衰えていく傾向を見せている。

2・2・0 待遇表現上の特殊名詞

人をあらわす名詞には、「奥様」「おかみさん」のように、それ
ぞれ待遇品位を持った名詞がある。これらを待遇表現上の特殊名詞
と呼ぶ。さきの接辞の場合と同じく、名詞においても、尊敬の方向
には衰え、卑罵の方向には榮えている。

。ダンナサマ↓ダンサマ↓ダンダン かつては士族・旧家の

主人の称であった。今日でも成人男子の尊称として用いる人も
ある。ダンタンは第三者敬語であって、相手に対しては言わな
い。

。タエエシヨ ダンサマより低い。

山口県萩市方言の待遇表現法

。オーラサマ 旧士族の夫人の呼称。この語を記憶している老
人も稀である。「お裏様」であろうか。

。オカッサマ 「お方様」旧士族の夫人を言う。今日は用いない。

。オカミ 酒屋などの妻女を言う。ダンサマ↑オカッサマ

タエエシヨ↑オカミと対応する。

。オゴッサマ 商家の妻女の尊称であったと言う。

。アツバイサマ 幼児語。明治の頃には士族の妻女を子供はこ

う呼んでいた。「きれいなおば様」の意であろう。

。オヘヤサマ 未亡人

。ゴーサマ↓ゴーサ↓ゴー お嬢様

。ダンボーサマ・ボチサマ 坊ちやま

これらのほとんどは忘れられて「おくさん」「お嬢さん」などがこ
れに変わるであろう。

2・2・2 卑罵の名詞

尊称名詞が身分に関する詞であるのに対して、卑罵の名詞は人の
品行を評する語に榮えている。その一端を見ても、シラモノ(わか
らず屋)・ヘラハリ(見栄坊)・ゲド(外道。罵倒語)ニユード
ー(入道。罵倒語)ゲブ(下卑。いやしい奴)・カッサバコ(
性悪婆)・スレガラス(すれっからし)等々、多種多様である。漢
語あり和語あり擬態語あり比喩表現ありといった、いかにも活潑自
由な造語法に注目する時、今後の新たな造語も、期待される分野で
ある。

2・2・3 人称代名詞語彙の体系

| 三人称 | 二人称 | 一人称 |
|---|---------------------------------|---------------------------------------|
| アノカタ コノカタ | アナタ | アタクシ アタクシラ |
| アノシユ | アンタ オーチ オウチラ | アタシ アタエイ アタシラ アタエエラ アタシドモ |
| アナジヨ アノニンゲンラ コナジヨ コナシヨ コナシヨ コナシヨ | コンタ | ウチ ウチヤー ウチヤーラ |
| アレ コレ コンナ コンナラ | オマエ アエエ | アシ アシラー |
| アイツ コイツ | オノシ オンシ オノレ オドレ キサマ | オレ オラ オララ オドマ オロマ |

おけるよりは品位の高い点に注目される。

3 待遇表現上の特殊文

3・1 応答文

問いに応じて諾否を言うことは、多くは一語文という特殊な形態をとり、かつその音相に待遇品位を託す点に特殊が認められる。

表示した一人称代名詞の待遇体系は下へむかって々つつしみ々から々たかぶり々へと移り、二、三人称代名詞では々見上げ々から々見下げ々への系列をなしている。アタシラなどのラは複数を示すこともあるが、婉曲表現の接辞と認められる場合もある。三人称のアレは「オーカタ アレワ キテジャロー。(大方あの人は見えるだろう。)」のように「テ」敬語と呼応しても用いられ、共通語に

ハイの類をていねいからぞんざいへの順に並べれば次のとおりである。

ハイ↓ハーン↓アー(アアー) ↓オー(オーオー) ↓ウン

ウンは子供ことばである。一方、否定表現では、遠慮のある相手に対しては、「ハイエ」と、まず軽く受けて後に否定する。

ハイエ↓イーエ ノー↓イーエ↓イヤウンナ

イーエ ノーは文末詞を添えて品位を高めたものである。否定の表現には肯定の場合より一段の配慮が認められる。聞き返し文やためらい返事の文も広義の応答文と認められよう。

ヤーツ↓エーツ は同年者以下への聞き返しであるが、疑問詞で問い返す時には、ナン ノー↓ナニ ヤー↓ナニ エツの系列がある。一方、ためらいの返事には、サー ノナタ↓サーノ ↓サーの系列がある。

肯定の応答文は文末詞をとらないが、その他の応答文では文末詞が文の待遇品位をさめることもある。

3・2 呼びかけ文

萩市方言における呼びかけ文には、アノ類・コリ(クリ)類・ヨノ類・オイ類がある。アノ ノナタ↓アノ ノンタ↓アノ ノー ハンは女性がよく用いる。呼びかけ文では敬意の高いものである。コリ サンセ・クリ サンセ↓コリ サエエ・クリ サエエがこれに続く。越ガ浜では、妻が夫に呼掛ける時にも、青年が老人に声をかける時にもよく用いられているが、市街地では次第に聞かれなくなっている。本来は尊敬助動詞であるサンセ・サエエが特異な

山口県萩市方言の待遇表現法

接続で訴えかけに働いている。転成の文末詞と認められよう。文末詞チャの続いたクリチャクリチャ(これってば〜)の品位はずっと下って目下への呼びかけ文となる。オイチャオイチャの品位は更に低く、同年以下の者への男性の呼びかけ文である。女性の呼びかけ文である、ヨウウチャガ ノー ハーの品位は、アノノー ハンに続いている。

3・3 文末詞・間投詞による待遇文

呼びかけ文や否定的返事文の場合に、文末詞がその待遇品位に大きくかわっていることは、今見てきたとおりであるが、文末詞によって文の待遇を示すことは、特殊文に限らない。いなむしろ、日常会話においては最もよく行われている待遇表現法である。「入っているのか」と同じことを聞いても、「ハイリヨル ソカ」より、「ハイリヨル ソカヤ」はややクていねいクであり、「ハイリヨル ソカノ」は更にもう少しクていねいクである。さてことばが長く続く場合、人は文の途中で訴えかけようとする。

ガッコーデ ノンタ ヒョージュンゴオ オシエマシヨ。

ソレデ ノンタ…… (老男↓)
間投詞ノンタで文の待遇品位は早くも決定され、それに応じて、「オシエマシヨ」の丁寧述部が導かれる。方言待遇法において、文末詞、間投詞による待遇法は注目されるものである。

3・4 挨拶文における待遇表現

挨拶ことば、すなわち挨拶文は、長い伝統に支えられて一つの型となっている。

。ゴト¹ケニヤ¹ ゴロ¹ジ¹ンガ¹ ゴゼ¹ンカイ¹ デ¹キマセンデ¹
ホントニ オタエエガタイ コトデ ゴザイマス。御当
家は御老人の御全快が叶いませんでおいたわしいこと
でございます。

。ナガイ コト オセワニナリヨリマシタガ ゴロ¹ジ¹マセ

ノ¹ト¹ト¹ト¹ ナエ¹ミ¹ニ ナリマシタ。 長らくお世話

になっておりましたが、まあ、この有様でございます、とう
／＼亡くなりました。

これは老人の死を悼む挨拶とその謝辞であるが、／＼といねい／＼表現の代表的なものと言えよう。／＼といねい／＼意識の下に一語一語が選ばれている。一般に、挨拶には古語や漢語が選ばれることが多いが、これもあらたまつていねいに言おうとするためである。しかし、挨拶の世界にも当然変遷は見られる。先にもあげた「オヒニナリマシタカ」や「オヨリナサンセ」も今はほとんど聞かれない。また、あやまって人の足を踏んだ古者は、思わず「アーメンタシ」と叫んだが、若い人々にはもはや理解出来ない挨拶だったようである。感謝の意の「めでたし」が、詫びのことばとして残存しているであろう。

むすび

むすび 1 待遇意識を支えるもの

秋方言の待遇法を総覧して／＼といねい／＼法が栄えていることを一特質として取上げることが出来る。人々はこの多様な／＼といねい／＼

表現を、何を基準にえらび用いているのであろうか。

数十年前までは、身分意識によって待遇表現をえらぶこともかなりあった。「子供の頃は両親をトト、カカと呼んだ。オトト、オカカと呼ぶ家はきまつていて、その他の家でオトト、オカカと呼ばせれば、笑いものにされた。」という、老人の昔語りはそのことをよく伝えている。「今日ではどの家もト¹チャン、カ¹チャンだ。」と言うように、身分意識はもはや待遇法を支えるものではない。尊称名詞のほとんどが忘れられていることもそのことを物語っている。

土地人はまた、「老人には……と言ひ、年下の者には……と言う。」と教示し、「他所から見えた方にはそんなことばは使いません。」とも言ふ。中年以上の人々においては、待遇意識を支えるものは／＼長幼のわきまえ／＼と／＼場のわきまえ／＼であることが推察される。

方言の待遇表現では、話題の主を遇する表現はしば／＼揺れるが、これも／＼場のわきまえ／＼によるものと思われる。外来者には「タナカセンセーガ イワレマシタ。」と語つても、土地人の間では「タナカセンセーガ ユーチャツタ。」となることがある。また、自己の両親や祖父母のことを他人に語るのに「ネチヨツテ。」(寝とられる。)「イキヤール。(行かれる。)」のように、軽い敬辞をそえて言うことも多い。これらは、相手中心の待遇表現であること、すなわち会話の場が重視されることのあらわれであろう。第三者を待遇する意識よりも、その場にふさわしく／＼といねい／＼に言うとする意識が強く働くのであろう。

／＼長幼のわきまえ／＼と／＼場のわきまえ／＼は、今日、都会の若い人々には忘れられて行くかに見える。日本語待遇表現法の世界に、そ

れはどのような影響を及ぼしていくことであろうか。

むすび 2 待遇法体系の比較考察

—— 日本語方言待遇法の体系を求めて ——

一方言社会の待遇法は、そこに独自の体系を持つとともに、近隣諸方言社会のそれとも深くかかわって、日本語方言待遇法の体系を形成している。萩市方言の待遇法が、石見、周防のそれと密接な関係を持っていることは当然予想されるが、海をはさんで中国方言に連る北九州方言のそれと比較してみることも、意義のあることであろう。今、助詞、助動詞の働きの注目される待遇法を取上げて、北九州市若松区島郷しまごう——響灘をはさんで長門地方に対して——のそれと比較してみると次のとおりである。

助詞・助動詞の働きの注目される待遇法

| | |
|---------------------------|------------------|
| 山口県萩市（長門） | 福岡県北九州市若松区島郷（筑前） |
| ナサレマス↓ナサイマス↓ナサンス↓ンサンス↓サンス | ナサイマス（稀）↓ナス |
| ンサレル・ンサエエル↓サレル・サエエル・サル | ナサル↓ナハル↓ナル |
| レル・エル・ラレル・ラエル | ルル・レル・ラルル・ラレル |
| ツシャル・サツシャル・ラツシャル（稀） | |

山口県萩市方言の待遇表現法

| | |
|------------------------------|---|
| ヤル | |
| オノマス・ゴノマス | |
| テデアリマス | |
| テジャ・テヤッタ↓チャッタ | テジャ・テヤッタ↓チャッタ |
| テオイデル（尊敬継続態） | テアル（尊敬継続態） |
| テ終止法 | テ終止法 |
| テ十ノ十名詞ハエーテノコト言われること√ | |
| ニ敬語 | ニ敬語 |
| ノとガの敬卑による使い分けはしないようである。 | 格助詞ノはガより待遇品位が高い。（老） |
| ゴザリマス↓ゴザイマス・ゴザエエマス↓ゴザンス・ゴワンス | ゴザイマツスル（老）↓ゴザイマス↓ゴザンス（老女・稀）・ゴワンス（老男・稀）・ゴザツスル（老）↓ゴザス（女）・ゴワス（男） |

| | |
|------------------|-----------------|
| アリマス↓アンス↓ヤンス | — |
| デス（青少年のみに用いられる。） | デス（全年層にさかんである。） |
| マス | マッスル（老）・マス |

両体系はよく似ていながら、しかもナサル敬辞にもマス敬辞にも、それぞれ中国色、九州色をはつきりと見せている。待遇体系全体にこうした比較考察を行う時、更に多くのことが明かになるであろう。全日本語方言待遇法体系の考察は、このような諸方言待遇法体系の比較・考察によって進めることも出来ようか。

× × × × × × × × × ×

対象を一小方言に限っても、待遇法体系の考察は、かなりに大きな問題である。この小稿では考察の視点を全般に見渡して取上げようとした。各表現法の詳細な考察、および農業区、漁業区、市街区の方言差、中・老年者と青少年の方言差といった、位相上の諸問題の考察など、多くのことが今後に残っている。

おわりに、常に懇切な御指導を賜った藤原先生、それから、快く調査に応じて下さった多くの方々から感謝申し上げます。

参考論文 藤原与一 方言敬語法の研究 序説（国語学六九集）